

ハリウッド映画においてドラゴン・レディーと称される中国人女性のキャラクターがある。このキャラクターは欧米人の中にあつた中国女性に対するイメージから創造されていたものであつたが、近代上海において社会進出を果たした女性たちの有り様と無関係ではなかつた。本論では、第1節 ハリウッド映画の「中国人」、第2節 上海近代化と女性の変容、第3節 摩登女性と上海イメージ、の3節に分けて、イメージと実像の間で揺れ動きながら形作られた米中の映画キャラクターを、近代化進む上海の歩みと重ね合わせて解析した。

アジア女性に与えられたステレオ・タイプは二種類有り、一つは日本女性に与えられた献身的な女性「蝶々夫人」、そして中国人女性から生まれた「ドラゴン・レディー」である。ドラゴン・レディーとは所謂烈女であり、西洋人男性を誘惑し、墮落させる存在である。特に上海の名を冠する作品に於いてその存在は強烈にアピールされており、ドラゴン・レディーと上海は共通した属性を持つように見受けられる。西洋人はアジア世界に「オリエンタル」と呼ばれる妄想を抱いており、これにはセクシャルなイメージも含まれている。しかし、長年の想像だけでこの強烈なキャラクターは生まれまいだろう。当時、西洋人が見た中国に、キャラクターの素地となる何かがあつたに違いない。

中国人女性のイメージ創出は上海の近代化と密接な関係があつた。中国近代の都市形成の中でも上海はリード役を果たしていたからであつた。近代化の進む上海において、女性たちは性的な視線を受ける存在であつた。学校に通い職業を得て社会進出をする女性たちは、外の世界へ出て行くにつれ、意図せず異性から欲望の視線を向けられることになった。ここでは19世紀末から20世紀前半に進行した上海における近代都市形成を第1次から第3次までの3段階に分けて見ていきたい。

非西洋圏における近代化においては、まず西洋化が先行し、続いてナショナリズムが生じる傾向にある。上海における近代化では視覚的な変化が顕著であつた。

上海における第1次都市形成期は19世紀末から20世紀初頭である。19世紀、近代化に先んじて上海に租界が誕生した。租界においては西洋人、特にイギリス人の手によって都市整備が行われていった。当初、「華洋分居」と言われ、中国人は租界で暮らすことは出来なかつた。しかし後に「華洋雑居」、つまり中国人も租界で暮らすようになり、中国社会に

欧米文化が伝播する下地が形成されていった。殊に上海においては度重なる中国の内乱によって、上海に人・カネが集まり始めた。

上海近代化の始まりは、西洋人の手によってもたらされたものだった。しかしなぜ上海だったのだろうか。それは上海が海外との交易を行うのに適した地勢であったためだが、また、明清時代を通して上海が位置する江南の地は、高い農産物生産に支えられた絹織物、陶磁器などの手工業が発達して経済発展を遂げていた。この基盤の上に、上海は中国全土を後背地とする物産の流通基地としての可能性を高めていたのであった。従って、租界はほかに天津、広州、漢口、廈門、鎮江、九江、蘇州、杭州、重慶にも作られたが、その地理条件より、上海に勝る都市形成を迎えた都市は他になかった。

第2次都市形成期は1910年代半ばから20年代である。海外資本の銀行が次々と作られ投資が進む中、20世紀に入ると租界の郷紳、官僚たちの資本が上海に投じられた。その結果、上海はアジアにおける交易の中心地となり、その重要性は増していった。また、経済活動が盛んになる中で西洋化の影響が徐々に下方へと広がっていった。以前はごく一部の人々だけに留まった娯楽が大衆へも広がり、彼らの需要を満たすために「新世界」「大世界」などの娯楽施設と先施百貨店、永安百貨店などの百貨店が上海に登場した。特に百貨店の外観は世界でも最先端の建築様式と摩天楼であるなど西洋的でモダンな生活をアピールする場であり、人々の消費を促す装置となった。これら娯楽施設、百貨店が生まれたことこそ、上海に大衆消費文化が生まれたことを示すものであった。

第3次都市形成期は1930年代から40年代にかけてである。上海の女性たちは西洋化＝近代化を進める時代に誕生した新しい大衆である。教育を受けることが許された女性たちはやがて高等教育機関に通うことも可能になり、専門的知識を有した職業女性が輩出した。また、上海では次々と工場が設立されたが、それらを支えたのは手先が器用な女性たちで、上海には多数の女工が存在していた。

こういった上海の女性たちが性的な視線を受けたきっかけとして、都市発展に伴う女性の社会進出があった。上海における工業発展はこの都市における旺盛な消費活動に支えられており、上海は一大消費都市であった。つまり、上海の発展には百貨店を中心とする経済活動が無視出来ないのである。上海の百貨店にはイギリスの毛織物、フランスの化粧品、アメリカの電化製品、スイスの時計と言った高級インポートブランドが数多く取りそろえられていたが、廉価な舶来品、国内の優良商品も少なからず取り扱われており、多種多様な購買層を相手にしていたことが分かる。これらの商品の広告には、

ポスターと曆を組み合わせた月份牌という媒体が用いられていた。月份牌の題材には女性が取り上げられ、モダンな服装の女性たちが西洋式の生活を楽しむ様子が描かれた。

また、百貨店には社会進出の一環、若しくは生身の広告的存在として女性の販売員が採用された。女性店員はモダンな生活を促す存在として、西洋化を推し進める存在の一つであったのである。つまり、上海の工場で働くのも女性であれば、そこで作られた商品を売るのも女性である。そこには男性も存在するが、今まで家内にいた女性が外で活動することは人目を惹く。更に、働くことで自分が自由に使える金銭を得た女性たちは、流行を取り入れた服飾に憧れるようになり、その変化、華やかさもあってメディアと強く結びついていった。女性たちの変化は西洋化が進んでいる証となってメディアに取り上げられ、そこに描かれる西洋的な女性の視覚イメージを受けて、女性たちは更にモダンなファッションを求めていった。

これら「女性」という大衆が最も注目を浴びたのが、1930年代から40年代である。この時期の上海では西洋化が進むとともにナショナリズムが臺頭していた。しかし、西洋化を真っ向から否定するものではなく、自国を省みるという意味であった。ところが西洋化されていった社会の中に誕生したものは、一方的なナショナリズムによって批判的な視線を受けることになった。その中のひとつが「女性」であり、特に「モダン・ガール」であった。

モダン・ガールとは、特に第三次都市形成期に現れた、流行の先端をいく女性たちを言う。社会進出を果たし、自らが自由に使える金銭を得た「大衆」女性たちは、上海を歩くのにふさわしい衣服を探し始めた。その中で彼女たちの目に留まったのが、当時女子学生の制服として採用されていた衣服、後のチャイナ・ドレスである。チャイナ・ドレスは中国的なデザインと西洋的なフォルムを以て生まれたことから、近代化が進む上海でなければ生まれなかったといってもよい。この衣服は徐々に女性たちを擒にしていき、映画女優が身に纏ったことで更に広まっていった。しかし、このモダン・ガールという存在は、他方から見ればいかがわしいキャラクターであった。

その要因として第一に、映画女優たちの出身が原因であった。上海は娼婦文化が盛んであり、娼婦から給金の良い女優に職業を変える者も少なくなかった。これは特に隠されていたことではなく、その出自から映画に登場する女性は性的な視線を集めることになった。総じて、その女優たちを模倣してファッションを楽しむ上海の女性たちもまた、いかがわ

しい視線を受けることになっていったのだった。

また、このチャイナ・ドレスであるが、今までの服装と比較すると身体的特徴が如実に出るデザインとなっている。機能性を考慮し、西洋的要素を取り入れた結果であるが、この露わになっていく身体性もまた、セクシャルに見られた原因の一つだろう。

更に、上海という都市の持つ消費的 성격が、上海と並行して変化を遂げた女性たちにも与えられたことが挙げられる。租界を有する国にとって、上海は支配するものであり、消費するものである。同じように、女性たちもまた、女性を上から見下ろす異性の支配的な視線を受け、消費されるもの、支配されるものとして見られるようになった。

しかし、女性たちは自ら性的なキャラクターになったのではない。近代化に促され、外との関わりを持つようになったことで女性たちは変化を遂げた。上海という土地も、租界が作られ、外との関わりを持つことで発展し、消費文化が急速な発展を遂げた。

その様子は中国国内の映画だけでなく、ハリウッド映画にも取り上げられた。上海の名を冠する映画には、強烈な魅力を持つドラゴン・レディーが登場し、その性的魅力を持って人を誘惑する。しかし、上海がいかかわしいキャラクターを得たのは、西洋に後押しされて起こった西洋化＝近代化が大きな原因である。西洋の長い歴史の中で培われた「オリエンタル」、東洋に向けられた夢想も人種差別も、西洋から見た妄想に過ぎない。

現実の上海とそこに住む女性たちは、たとえどれだけ他国や異性からいかかわしさを含んだ視線を受けたとしても、その成長を止めることは無かった。なぜならば、その視線を受けるのは他国や異性が作り上げた想像上の土地とキャラクターに過ぎず、彼女たち自身はその妄想を喚起する存在と言うだけで、「オリエンタル」自身ではないからである。